

令和 2 年 7 月 4 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03646

研究課題名(和文)18世紀フランス政治経済学の理論的解明・カンティロン、ケネー、チュルゴを中心に

研究課題名(英文)Theoretical approach to the political economy in 18th century France

研究代表者

黒木 龍三 (KUROKI, Ryuzo)

立教大学・名誉教授・名誉教授

研究者番号：70186534

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀フランス政治経済学の意義と理論的先進性について、カンティロン、ケネー、チュルゴを中心に、3年間、研究を行った。アントン・マーフィー、ジャンニ・ヴァッジ、フィリップ・スタイナー、クリストフ・サルヴァなど海外の研究者や、川出良枝、米田昇平、喜多見洋、隠岐さや香、安藤裕介の諸氏に呼びかけて国際的共同研究を実施、その研究成果を、'The Foundations of Political Economy and Social Reform, Economy and Society in Eighteenth Century France' と題してイギリスRoutledge社から出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

科学的な経済学はアダム・スミスを中心としたイギリスで誕生した、というのがもっぱらの定説であるが、18世紀のフランスでも、経済社会の科学的解明は始まっていた。3年間の研究助成を受けて、主にカンティロン、ケネー、チュルゴについて、理論的側面から研究し、一定の成果を得た。カンティロン、ケネーは、土地を中心とした再生産理論を確立、チュルゴは、初めて「資本」の概念を明らかにする。また、古典派と共通点が多いとされるチュルゴは、実際は「価値」について効用を中心とした主観価値説の立場をとっていたこと、そしてローヤフォルボネ、ルソーなどの研究も加えて、国際的共同研究の成果を出版できた意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：On the superior advance of the French Political Economy in 18th century, I have mainly studied Cantillon, Quesnay, and especially Turgot for three years. And at the same time, I asked prof. Antoin Murphy, prof. Gianni Vaggi, prof. Philippe Steiner, and prof. Christophe Salvat from abroad, and prof. Yoshie Kawade, prof. Shohei Yoneda, prof. Hiroshi Kitami, prof. Sayaka Oki, and prof. Yusuke Ando from Japan with respect to the submission of the contribution of each special field, and succeeded to publish our contributions under the title of 'The Foundations of Political Economy and Social Reform--- Economy and Society in Eighteenth Century France' from Routledge publisher.

研究分野：経済学史、理論経済学

キーワード：18世紀フランスの経済学 カンティロン ケネー チュルゴ 重農主義 再生産 客観価値と主観価値
資本

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

「18世紀フランス政治経済学の理論的解明—カンティロン、ケネー、チュルゴを中心に」と題した3年間にわたる研究をほぼ満足する形で終了することができた。通説では、科学的な経済学は、アダム・スミスを中心としたイギリスで誕生した、とされるが、18世紀のフランスにおいても、経済社会の科学的解明はすでに始まっていた。当初は「カンティロン、ケネー、チュルゴを中心に、18世紀フランスの政治経済学が提示した経済学の理論的輪郭を析出する」ことが目的であった。フランス啓蒙の時代にあつて、エコノミー・ポリティーク（政治経済学）は、今日でいう「経済学」のみならず、自然科学的知見はもちろんのこと、道徳哲学、自然法学、政治理論など、多彩な側面を併せ持っていた。とくに、地主・農民・商工業者の3階級からなる社会の統治構造や税制・財政問題、身分制の桎梏、コルベルティズムの行き詰まり、そしてアンシャンレジームの歴史的文脈を考慮すれば、当時、近代社会の幕開けに相応しい新たな学問的潮流が台頭したのは不思議ではない。カンティロンの重視する経営者の役割、ケネーの「経済表」、そしてチュルゴに顕著な自由主義と彼に固有な地代理論を中心に国際的研究をも希求する研究助成を申し込んだ当初の背景は、以前から、18世紀フランスの経済学者たちのアプローチに並外れた科学的解明力を感じていたからである。研究に取りかかる初めは、科学的な分析道具としては、主に線形数学とその応用である産業連関分析、線形計画法でかなりの範囲をカバーできると考えていたが、後にそれだけでは不十分であることが判明、とりわけチュルゴの地代論を分析するためには、微分を中心にした解析学に頼らざるをえないこととなった。

2. 研究の目的

18世紀フランスの経済学は、17世紀の隣国のロックやペティの成果や自国のボワギルベールの活躍を受け、飛躍的に発展する土壌を得ていたといえる。マンデヴィルの『蜂の寓話』に代表される「社会の進歩のためには、公益よりも私利が優先されて良い」という思想は、すでに世俗の実社会では定着し始めていた商業的（初期資本主義的）習慣や行動原理を追認するものであった。重商主義時代にあつて特異な信用理論を展開したジョン・ローとも親交のあったとされるカンティロンは、「企業家精神」の提唱者として有名であるが、同時に、ケネーに先駆けて、社会は、地主、農民、商工業者から構成される、とする「三階級分析」を提唱し、農耕の土地を中心にした再生産理論を確立したことも指摘されてしかるべきである。ケネーの業績は、カンティロンの知見を科学的に押し進めて、経済学史上、初めて産業連関分析の基礎を与えたことにあるといえる。チュルゴは、「紙幣こそが経済の潤滑油として最も優れた媒介物である」として無制限な紙幣発行を試み、国家財政と経済そのものを破綻させたローの信用理論を批判、初めて近代的な「資本」の概念を明らかにした。

こうした、18世紀フランスの主だった経済学者に焦点をあて、彼らのオリジナルな理論的成果が、今日的視点から見て、どれほど科学的分析に耐えうるのか検討を試みるのが本研究の主な目的であった。さらに以下に示す3か年の研究計画で振り返るように、本研究の目的の1つに、研究代表者の持つ、国際的に著名な経済学者のネットワークを用いた共同研究があった。

「平成29年度の研究実施計画」から：研究代表者は、A. R. J. チュルゴについて、とくに『省察』を読み込むことで、彼の経済発展論、資本理論、そして地代論に注目して研究中であり、その成果の一部は既に学会誌に英語で発表し（『経済学史研究』56巻2号）、ヨーロッパ経済学史学会大会（2016年）で報告もした。しかし依然として理論的骨子を大まかに抽出したに留まっておろ、初年度は、とりわけ「貨幣」についての論考を検討することで、チュルゴの貨幣観を資本理論との関わりで検討したい。また、当時もまだキリスト教的倫理が世俗では色濃く残ってい

たせいか、ウズラ＝利子の取得の正当性がしばしば論じられる。カンティロンに見られる利潤取得の正当性と、利子取得の正当性をリンクさせてみせ、経営の才覚に対する利潤報酬も金銭の貸出による利子報酬も基本的には無差別であると主張するあたりは、ケネーと較べても、資本一般についての理論の析出という点で一頭地を抜いている。したがって、カンティロンやケネーとの比較において、チュルゴの資本理論の特徴を徹底して押さえることが1つの目標である。今ひとつは、土地の生産性を巡る問題で、ケネーとチュルゴの立論の相違に焦点を当てる。ケネーは、土地の物的生産性に着目し、資本制的耕作には、大土地所有が不可欠として、fermage（大規模農業）の metayage（封建的な小規模小作農）に対する優越性を強調したことは周知である。しかしチュルゴは、耕作地の面積の大小ではなく耕作の方法が問題であると主張し、そこに資本家的経営の近代性を見て取った。この観点の相違は、資本主義の発展における「経営者」の役割を位置づける上で重大な課題の1つと思われ、カンティロン、ケネー、チュルゴの3者の比較を試みる。

「平成 30 年度の研究実施計画」から：カンティロンと、その同時代人であるジョン・ローの研究を目指す。ローは無制限な紙幣の増刷とミシシッピ流域株式会社の株式の過剰な供給で、一時はバブル的な景気の過熱を招いたが、結局はほとんどすべての資産価値の崩壊、というとんでもない遺産を18世紀初頭のフランスに残した。その後、「ローのシステム」は一般にも忌み嫌われ、チュルゴなどは厳しく論難するが、理論的観点からは果たしてどうなのか、これを問うことが、18世紀フランスの貨幣・信用理論(停滞)の検討の端緒になる。ダブリン大学のアントン・マーフィー氏はこの分野の大家であり、研究代表者は、立教大学で開催された国際会議に招聘して親交もあることから、彼が独自に収集し、その手元にある、ローに関する資料、とりわけ当時のパンフレットや、手紙類を読み、当時、実際に行われた金融政策とその影響について何らかの新しい発見があるか、研究したい。また、ローと親交の深かったカンティロンの貨幣・信用観、そしてローに対する見方、についても押さえておきたい。カンティロンの土地理論、資本理論、そして今日で言う「経営者資本主義」につながる考え方についてさらに深めていきたい。ローの失敗以降、銀行など金融制度の構築は、フランスで大幅に遅れることになる。その間、それでも金融仲介を専門に行った機関(ノッタリー)があったはずで、当時のフランスの金融制度についても研究目的の1つとしたい。

「平成 31 年度の研究実施計画」から：最後の年には、ケネーについても、カンティロンやチュルゴとの異同を踏まえ、研究を深化させたい。また、イギリスの、ロックやバークリー、チャイルド、スチュアート、スミス、そして少し時代的には離れるが、リカードウの理論的貢献とフランス学派のそれを比較し、決して18世紀フランスの政治経済学の形成が、イギリスのその後塵を拝していたわけではなかったことを歴史的・科学的事実として明らかにしたい。とりわけ注目するのは、再生産理論の継承についてと、地代と土地価格の理論並びに貨幣理論の比較である。特にチュルゴの体系は、本当に再生産を技術的に前提にしているのか、あるいは、新古典派の一般均衡理論の先駆けと言えるのか、これは理論研究者にとって興味深い課題である。最後の年に、パリ大学にジルベール・ファッカレロとフィリップ・スタイナー両氏を訪ね、カンティロン、ケネー、チュルゴの理論的骨格の異同についてヒヤリングをする中で確認をしたい。最終的なまとめとして、ファッカレロ（パリ大学）、マーフィー（ダブリン大学）、ジャンニ・ヴァッジ（パヴィア大学）、米田昇平（大阪産業大学）、喜多見洋（大阪産業大学）など、研究協力者を内外に募り、立教大学において「18世紀フランスの政治経済学」と題して国際シンポジウムを開催し、研究成果を世に問いたい。

以上が当初、研究計画に掲げた研究目的であった。

3. 研究の方法

本研究の方法として、主に次の3つの方法を採用した；

(1) 原典を丁寧に読み込み、また先人たち（マーフィー、ファッカレロ、ヴァッジなど）の研究成果を渉猟しながら、18世紀フランスの主だった経済学者たちの提唱した理論に科学的に納得の行く解明力があるかどうかを確認する。

(2) 国際的な研究者のネットワークを頼りに、国際会議（ヨーロッパ経済学史学会（ESHET））に毎年参加して学会報告を行い、また直接、世界的に著名な専門家たちとも交流を深めることで個別に指導を受けることができた。国内の経済学史学会大会やケインズ学会大会においても報告、専門家から評価を受けることができた。

(3) 最終年度の2019年には、立教大学において、18世紀フランス、とりわけ、重農学派とその後の経済学への影響を中心に国際会議を開催、国内外の多くの研究者たちと実り多い交流を持つことができた。

4. 研究成果

まず、研究代表者自身の研究成果についてまとめておく。チュルゴについては、とりわけ農業において、土地の収穫逓減から、農産物の右上がりの供給曲線を考えていたことは明らかである。また、自由競争を推進する立場から、産業部門固有の差はあるけれども、基本的に投下資本から得られる利潤率が均等化すると主張したことを強調した。古典派と共通点が多いとされるチュルゴではあるが、実際は「価値」について効用を中心にした主観価値説の立場をとっていたこと、そして、貨幣と信用についても、たとえばマーフィーの否定的な見解に反して、独自の見解を持っていたことも指摘した。例えば、貨幣の機能について、それは「翻訳可能な言語」のようなものだ、とし、信用さえあれば紙幣（paper money）で良い、とさえ述べている。この、チュルゴによる土地の収穫逓減にもとづく差額地代の考えとそれを元にした土地価格の発想、そして『価値と貨幣』についての研究代表者の見解は、独自のものである。

2019年11月23日、立教大学において、International Conference on Physiocracy and Its Influence on Later Economists と題して、パリ大学から、ジルベール・ファッカレロ、フィリップ・スタイナー、リール大学から、ティエリー・デマルとアレクサンドラ・イアール、グラーツ大学から、クリスチャン・ゲルケの各氏を招聘し国際会議を開催、ケネーを中心としたフランスの重農主義、チュルゴの経済学および社会哲学、重農主義の古典派やマルクスに与えた影響について議論した。

当初の研究計画のうち、18世紀フランスの経済学者たちについての分析については国際的なネットワークをつうじての共同研究が実を結び、かなりの程度満足のいく成果を上げることができたと自負する。また、上述の2019年度の国際会議で、デマルとイアールの両氏にスコットランド啓蒙の経済学者たちに重農主義がどれほど受け入れられたか、ゲルケにリカードウなど古典派やマルクスと重農主義との関連について報告を受けたのは大変有意義であった。

3年間の研究で一番の成果は、何と言っても、国際的共同研究の成果を英文での専門書の出版という形で国際的に発信できたことである。海外からは、マーフィーがジョン・ローを、スタイナーが重農主義の社会思想を、ヴァッジがケネーの経済理論を、そしてクリストフ・サルヴァ（リール高等師範大学）がルソーを論じ、国内からは、川出良枝（東京大学）がル・ブランを、安藤裕介（立教大学）が重農主義の戦争論を、米田昇平がフォルボネを、

隠岐さや香（名古屋大学）が百科全書派を、喜多見洋がプレボーを、そして本研究の代表である黒木がチュルゴを取り上げ、Routledge 出版社から The Foundations of Political Economy and Social Reform---Economy and Society in Eighteenth Century France---と題した研究書を出版した（2018 年）。18 世紀のフランス経済学について、ヨーロッパの著名な研究者と日本の研究者が一同に集まって研究成果を 1 冊の本にまとめあげることができたことは望外の幸せである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 黒木龍三 | 4. 巻 第32号 |
| 2. 論文標題 南北問題と不等価交換 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 日仏経済学会Bulletin | 6. 最初と最後の頁 67-72頁 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|----------------------|
| 1. 著者名 黒木龍三 | 4. 巻 第193巻第1号 |
| 2. 論文標題 チュルゴの「価値と貨幣」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 経済論叢（京都大学経済学会） | 6. 最初と最後の頁 49-58頁 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 黒木龍三 | 4. 巻 第86号 |
| 2. 論文標題 資本主義の起源 経済理論と歴史認識 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 立教経済学論叢 | 6. 最初と最後の頁 1 - 16頁 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|------------------------|
| 1. 著者名 黒木龍三 | 4. 巻 第71巻第3号 |
| 2. 論文標題 チュルゴの資本理論－差額地代と土地価格との関係で | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 立教経済学研究 | 6. 最初と最後の頁 103-119頁 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件）

| |
|-------------------------|
| 1. 発表者名 黒木龍三 |
| 2. 発表標題 南北問題と不等価交換 |
| 3. 学会等名 日仏経済学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 KUROKI, Ryuzo（黒木龍三） |
| 2. 発表標題 Contributions to Economics by French Economists in 18th Century |
| 3. 学会等名 International Conference on Economic Theory and Policy（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|-------------------------|
| 1. 発表者名 黒木龍三 |
| 2. 発表標題 チュルゴの「価値と貨幣」 |
| 3. 学会等名 経済学史学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 KUROKI, Ryuzo（黒木龍三） |
| 2. 発表標題 Comments on "Gian Rinaldo Carli (1720-1795)" a remarkable early money doctor |
| 3. 学会等名 European Society of the History of Economic Thought（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 KUROKI, Ryuzo (黒木龍三) |
| 2. 発表標題 Turgot's "Value and Money" |
| 3. 学会等名 European Society of the History of Economic Thought (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|-------------------------|
| 1. 発表者名 黒木龍三 |
| 2. 発表標題 18世紀フランスの貨幣観 |
| 3. 学会等名 ケインズ学会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 黒木龍三 |
| 2. 発表標題 Turgot's capital Theory |
| 3. 学会等名 European Society of the History of Economic Thought (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 Ryuzo KUROKI ed. | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 Routledge | 5. 総ページ数 202 |
| 3. 書名 The Foundations of Political Economy and Social Reform ---Economy and Society in Eighteenth Century France | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|